

「人類社会の進化史的基盤研究（1）」（2007年度第4回研究会）

日時：2008年3月15日（土） 午後1時～6時半

場所：AA研小会議室（302）

内容：1. 大村敬一（AA研共同研究員、京都大学）

「社交としての生業：アフォーダンスをアメニティに変換するオートポイエーシス・システム」

2. 足立薫（AA研共同研究員、立命館大学）「霊長類学における非構造と構造」

1. 「社交としての生業：アフォーダンスをアメニティに変換するオートポイエーシス・システム」大村敬一（共同研究員、京都大学）

1 発端：Stand Alone Complex の問題系

「我々の間にはチーム・プレーなどという都合のよい言い訳は存在せん。あるとすれば、スタンド・プレーから生じるチーム・ワークだけだ。」（映画『甲殻機動隊：STAND ALONE COMPLEX—The Laughing Man』での荒巻公安9課長のことば）

「去年、アザラシをとってアザラシをソリに括りつけていると、ホッキョクグマが私に向かって走ってきた。スノーモービルのエンジンをつけたままだったので、運良く逃げられた。しかし、このホッキョクグマは私を追跡していた。もうその姿が見えなくなったので、イグリヴィガクトグヴィク島でソリをアザラシごとおいて、別の場所でアザラシを始めた。そこでは何も獲れず、ソリのところに戻ると、追いついてきたホッキョクグマが、ソリに括りつけたアザラシを食べていた。私に気付いたホッキョクグマは、アザラシをソリごとくわえて持ち上げ、うなった。ものすごい力で恐ろしかった。ホッキョクグマが逃げずにアザラシをまた食べ始めたのでホッキョクグマを撃つと、アザラシのうえに倒れて死んだ。飢えたメスの成獣で、さばくとほとんど脂がなかった。この時は、後ろからではなく、前からホッキョクグマと遭遇したのでついていた。」（Omura 2007）

1-1 出発点としての Stand Alone Complex（stand alone でありつつ complex になる）

この研究会の出発点

＝「集団は所与のものではなく、関係を生み出す相互行為の実践を通して生まれ、維持される」

→集団について考えること＝相互行為による関係の制御について考えること

（1）どのような相互行為がどのような関係を生み出し、どのような集団を形成するか？

◎相互行為と関係の類型論（集団の類型論ではなく）

◎その類型が多様な集団を生み出すメカニズムの解析

（2）関係を安定させるために、どのように相互行為を安定させるか？

（←関係が一回限りでは、集団は維持されえないが、相互行為は常に不確定）

荒巻課長や風間真（エリア 88）沖田艦長（宇宙戦艦ヤマト）の言葉はたしかに美しいが一回限りでは困る

◎「分けると同時に繋げる」コミュニケーションが集団を生み出すと言うだけでは不十分

◎相互行為を安定的に反復させて関係を安定化させる装置の考察（→「制度」の問題へ）

（3）関係と相互行為の安定のために必要とされる条件は何か？

条件＝人間の生物学的条件／生態的条件／集団のシステムそれ自体の条件

（4）集団の変化（進化）

＝関係の不安定化による相互行為と関係の再調整を通じた集団の再組織化と分化

1-2 この発表の目的

- （1）集団を維持するためのイヌイトのやり方を検討することを通して、
- （2）イヌイト社会における「相互行為を安定的に反復させて関係を安定化する装置」を明らかにし、
- （3）集団（Stand Alone Complex）を可能にする条件を考える。（外堀からの推論）
（集団が形成される理由ではなく、それが可能な条件について考える）

2 イヌイトの選択：管理と支配を放棄した人々

2-1 相互行為にかかわる基底的な普遍的問題（ダブル・コンティンジェンシーをめぐる問題）

（1）「相手がいる」

相手が何を考えているのか、自らの行為に対してどのように行為を返してくるのか、まったく不確定である。相互行為にあっては、相互の行為の動機と意図は常に相互に不透明で、ただ予期するしかない。

（2）時間的な不可逆性と局所性

相互の行為がどのような行為なのかは、相互行為の事後にしか確認できない。したがって、相互行為の当事者には、相互行為の全体を見渡すことはできない。

（過去の相互行為についてはその全体を見渡すことができるように見えるかもしれないが、相互行為は未来に向かって無限に開かれており、過去の相互行為もその未来の相互行為に接続しているため、結局のところ、相互行為の全体を見渡すことはできない：終わった恋も次の恋によって規定され、終わった人生もその人生に接続する別に人生によって規定され、この意味で終わりはない）

（3）項に対する関係の優位

逆に言えば、相互行為の事後に、その相互行為によって相互の行為が規定される、つまり、関係の成立をもって、その関係の全体の中で個々の行為が規定されるのであって、その逆ではない。

（4）自他の相互依存性（ダブル・コンティンジェンシー）

「時間的な不可逆性と局所性」と「項に対する関係の優位」から、相互行為下にある自他は、期待のレベルで相互に依存し合って不可分であり、行為の主客が未分化である。相互行為におけるどのような行為も、相手に対して自己が期待すること（こうすれば相手はそうするだろ

う)のみならず、自己に対して相手が期待すること(こうすれば相手はそうするだろう)にも依存しており(「私がこうすれば、自分がこうすれば相手がそうすると期待しているあなたは、そうするだろう」「あなたも自分がこうすれば相手がそうすると期待しているだろうから、私がこうすればあなたはそうするだろうと期待することができる」)、一つの行為には期待のかたちで自他が混じり合って、行為の主客が未分化である。

(5) 相互行為の普遍性

以上の問題は、社会関係に限られるわけではなく、あらゆる関係(生命体、非生命体を含むあらゆる存在者との関係)に妥当する。

◎この相互行為によって構築される関係がアフォーダンスと呼ばれる。

※アフォーダンス=ある生物がその活動の調整を通して環境と関わり、その環境とある一定の関係に入ることによって利用することのできるようになる実在の潜在的資源。ある人間にとって、他の人間もその環境である以上、人間も含まれる

たとえば、ホッキョクグマはその本質として、人間と関係を交わそうと交わすまいと、人間が見たり、追跡したり、射撃したり、食べたり、衣服や様々な道具をつくったり、その他、さまざまなことを人間に潜在的に許容(アフォード)します。これら、ホッキョクグマが人間に許容することが、人間にとってのホッキョクグマのアフォーダンスです。

しかし、このアフォーダンスは、たとえば、先にあげたホッキョクグマの逸話にあるように、あるホッキョクグマと遭遇したある人間が、狩猟の実践を通して自らの行動を適切に調整し、そのホッキョクグマと適切な関係に、たとえばハンター/獲物という自他関係に入らなければ実現されません。そのアフォーダンスを実現する適切な関係に入り損ねれば、そのアフォーダンスは潜在的なままです。逆に、誤って獲物/ハンターという自他関係に入ってしまうと、その人間はホッキョクグマに食べられることを許容(アフォード)してしまうことになります。つまり、ホッキョクグマに食べられてしまいます。アフォーダンスは、環境に常にすでに潜在的資源として実在してはいますが、それを実現して活用するためには、その人間が自らの行動を適切に調整して、その環境と適切にかかわらなければならないのです。

◎おそらく相手が自己の期待を裏切ればそれだけ、相手に「知性」を感じるが、その裏切りの度合いが極端になって予測不能になると「知性」を感じなくなる。つまり、相互行為を通して相手の行為が法則化を許すほど安定的に反復されることが確認されるほど、相手に「知性」が感じられなくなるが、相互行為を通じた相手の行為が過度にランダムになっても、相手に「知性」が感じられなくなる。「知性」は相互行為の反復の度合いに依存する

(6) 認知に対する相互行為の優位

「項に対する関係の優位」と「時間的な不可逆性」と「相互行為の普遍性」から、相互行為は認知に論理的に先んじる。つまり、知るということは相互行為の結果であって、知っているから行為するのではない。したがって、相互行為に先んじる知識はすべて予期であり、蓋然的な知識はあっても確定的な知識はない。(この場合、知識の蓋然性は相互行為の反復の度合いに依存する→反復可能性)

(7) 相互行為の不確定性

したがって、結局のところ、不確実な相手の行為に依存するあらゆる相互行為にあっては、同じ相互行為が安定的に反復する保証はどこにもない。

2-2 相互行為を制御して一定の関係を安定的に反復させるいくつかの方法

(1) 前提となる条件

- (A) 何人なりとも、相互行為の外側に出てその外側から相互行為を操作、制御することは原理上、絶対に不可能であり、
- (B) 相互行為の制御は、あくまでも相互行為の内側から、つまりその当事者、関係の各項の立場から行われなければならない。
- (C) したがって、これからの考察は相互行為の当事者の視点から行われなければならない。

(2) 相互行為の制御の方法Ⅰ：戦略（「自分の期待＝他者の行為」となるように不確定性を排除）

不確定な相手の行為に依存することによって生じる相互行為の不確定性を排除し、ある型の関係が成立するような相互行為が安定的に反復するように、相手の不確定性を排除し、「こうしたら相手は必ずこうする」というかたちで、相互行為の時間的な不可逆性と局所性を空間的な可逆性と全域性に変換する。つまり、相手に対する自分の期待が決して裏切られず、常に実現されるような状況をつくり、期待が法則や規則になるようにする。こうすると、「自分の期待＝他者の行為」となるため、不確定な他者が消えてくれる。その結果、相互行為に偶然性が介入することがなくなるため、時間の不可逆性に意味がなくなって、すべてが自分の期待の想定内におさまリ、相互行為の外に出て関係の全体を見渡しているような錯覚が生じる。

(A) 相手の支配と管理：相手への直接的な介入（→これが相互的になると「合意」になる）

相手から自由を奪って飼い慣らす（相手を規則に従わせる）

＝自分の行為に対して、自分の期待にあう行為で応えるように相手を訓練し、相手が勝手な行為で応えないようにする。つまり、相手が自分にアフォードすることを型はめする。

(B) 自分の期待の精密化：相手への間接的な介入（→これが相互的になると「腹の読み合い」になる）

相手の自由を限界づけている本質を見きわめる（相手の従っている規則を利用する）

＝相手を知り尽くして相手の行為のパターンを法則化し、その相手の法則にあわせて自分の期待を構築する。「相手はこうされるとそうする」から「相手に対してこうしてそうさせる」

(3) 相互行為の制御の方法Ⅱ：戦術（相互行為の不確定性を受け入れて利用する）

＝カウンター・アタックの連打（試行錯誤）：自分の行為に対して、相手がどんなに勝手に応えようと、その相手の行為にさらに行為で応えることによって、最終的には一定の関係を落ち着かせる。

不確定な相手の行為に依存することによって生じる相互行為の不確定性を甘受し、次々に打ち出される相互の行為によって関係のあり方が変わってゆく相互行為の不確定性を利用することによって、自分の行為に対して、たとえ相手がどんなに勝手な行為で応えてきても、その次の自分の行為によって相手の行為の意味を変えつづけることによって、最終的にある一定の型の関係が反復するようにする。

(4) 戦略に対する戦術の基底性と両者の連続性

(A) 戦略の二つのやり方でも、その前提として相互行為を試行錯誤的に反復することが必要。

◎相手の支配と管理：相手を飼い慣らすには、相互行為の反復が必要。

◎自分の期待の精密化：相手を知って期待を精密化するためには相互行為の反復が必要。

(B) 戦術的にカウンター・アタックの試行錯誤を繰り返してゆくと、自分の期待の精密化が起き、相手にも同様な事態が想定されれば、相互行為の当事者間で相互に「自分の期待＝相手の行為」という事態が達成される。(→複雑性の縮約、ゼマンティック、文化?)

2-3 イヌイトの理想的なパーソナリティと感情表現にみるイヌイトの社交の原理 (Briggs 1968)

(1) イヌイトの理想的なパーソナリティ

= 「賢明さ、思慮、分別、思考 (ihuma-)」 + 「慈愛 (nagilik-)」

(A) 「賢明さ、分別 (ihuma-)」(自律した「大人」の条件)

イホマある「大人」(社会的に適切な行動を行なう自律した人物)

= ○いかなるときにも平静さを失わずに困難を受け入れる

○決して怒らずに自己をバランスよくコントロールする

○相手の自律性と意志を尊重 ○物事に対して先入観をもたない

○具体的な経験に依拠しない一般化を保留 ○仮説に基づくむやみな推論を行なわない

○事物の潜在的可能性を臨機応変に活かす、などなど

「白人 (qaplunaat)」(よく怒り、感情を表に出し、相手を支配しようとする)

= 「子供っぽい」(nutaraqpaluktuq) (子供にはイホマがない)

(B) 「慈愛 (nagilik-)」(人物の善性の基準)

○基本的な意味 (ilammariit 内)：愛する人と一緒にいたい、抱きしめたい、◎守りたい

○物理的な意味でも精神的な意味でも人々を助けて保護する精神

○普遍的な意味①= 気だてが穏やか (even temper)：穏和で誰とでも社会的、どんな状況でも怒らない

○普遍的な意味②= 他者と分かち合い、他者を助ける

○人間の本性としての慈愛：「人間は慈しみ愛されるべき存在として定義され、慈愛の感覚と行為は敵意 (urulu-, ningaaq-, huaq-) の感情や行為のアンチテーゼであり、したがって、敵意を人間に向けるべきではない。」

慈愛のないとされる振る舞い

= けち、欲張り、進んで他者を助けたり分かち合ったりしようとし、

気難しさ (黙ってすねることから、暴力を爆発させることまで)

「白人」= 気難しく、怒りっぽく、変な考えに取り憑かれている

※ilagiit (親族、キンドレッド：但し、親しい友人から血縁親族までを含む多義性) = 「どこへ行っても、いずれは (出身グループに) 戻って、食べ物を分かち合い、互いに助け合い、そして一緒にいる関係のある人々」 (Balicki 1989: 112)

※*ila*は「部分」の意味で、「*kuup* (川の) *ilanga* (部分)」などのかたちでも日常的に使う。*-giit*は「集合」なので、*ilagiit*の字義通りの意味は「部分の集合」

※*ilagiimariktuq* (限定イラギート (*kindred-based grouping*), 拡大家族) = 「拡大家族関係にある人の名かでも、同一の場所に住み経済活動などで緊密な協力関係にある人々、すなわち、具体的な社会集団を形成する人々を指す。結果的に、後者(限定イラギート)はエゴの親、兄弟姉妹、妻と子供たち、マゴ、オジ、オバ、祖父母やイトコの人々であることが多くなる。」(岸上・スチュアート1994)

(2) 相反する分別と慈愛のジレンマとバランス

(A) 「分別 (*ihuma-*)」 = 個々人の意志と自律性への欲求と尊重 = *Stand Alone* への欲求と尊重 (→見栄と面子)

◎自分が憐れみをかけられたり、面倒をみられたりすることがないようにする欲求

◎相手の意志と自律性の尊重

← もっとも嫌われる質問: ①自分や他人の行為の動機、②人々の活動の本性、③未来

「どうしてそんなことをしたの?」 *Why?* = 非難や敵意ととられてしまう

返答: 「知らない」「そう考えただけだ」「それが私の意志だ」など

◎個々人の行為 = 個々人の意志 (*ihuma-*) によってのみ規定される

≠ 社会的な条件によって規定される

← 「誰がお祈りするの?」 - 「祈る意志 (*ihuma-*) がある人は誰でも」

「誰と誰が名前を忌避するの?」 - 「名前を忌避する分別 (意志 *ihuma-*) がある人は誰でも」

◎ *Ajurnatman* (仕方がない: *because it cannot be helped, because forces outside me make it impossible*)

= 現実的な諦念: 望ましくないが避けえない状況をプラグマティックに認識して平然と受け止める

「相手がそうしたくないのだから仕方がない」「私はそうしたくないのだから仕方がない」

→ イヌイトにとって「かっこいい人」= 危機的な状況や物事がうまくいかないときに、

笑いながら平然と *Ajurnatman* と言う人 (危機的な状況はかっこをつけるよいチャンス)。

◎これが過ぎると反社会的になる (慈愛に乏しいと評価される)

ihumaqaqluaqtuq (大きなイホマをもつ、独りで黙って思い悩む人) → 悪意や敵意を溜め込む

= 危険な人物 (悪い意志、嫉妬、強い怒りなどによる呪いを通した危害)

(B) 「慈愛 (*nagilik-*)」 = 穏やかに語り合うこと、共に笑うこと、助けること、分かち合うことを通した社交性

= ◎相手との関係を断ち切らないこと。

◎ 相手への強烈な愛情 (とくに *ilammariit* 内で) (愛する者の不在に対する強烈な孤独感 → 強烈なホームシック)

◎ 敵意や悪意がないということ (自分は恐れるべき人間ではないということ) → 楽しい人 (*quvianaqtuq*)

敵意 = 口撃 (*huaq-*)、攻撃 (*ningaaq-*)、塞ぎ込み (*qiquq-*)、悲しみと当惑 (*urulu-*)、妬み (*tuhuu-*)、孤独 (*hujuujaq-*)

◎自分が拒絶されて孤立することへの恐怖 (*ilira-*: 自分の要求や依頼が拒絶されること、非難されることへの恐怖)

= 大人の最大の恐怖 (危険な動物や悪霊、危険全般への恐怖 (*iqhi-*) は子供の恐怖) → 従順さの醸成

「妻が怖い」と言っても、*nulijara iqhinakturaalukLu* はジョーク、*nulijara iliranaktuq* は真剣

「遠慮無く (恐れることなく: *don't be afraid (ilira-)*) 頼みなさい。私たちは優しい人間だ。決して拒みはしない」(*qaplunaat* の場合: 「遠慮無く頼みなさい。差し障りがあれば断るから」)

→ 常に敵意がなく、恐れる必要がないということを示す必要に迫られる

→ 皆で笑うことの重要性 (「笑い」= 社交性の表徴)

理想: 自分を皆で笑う (滑稽な自分、自分の不運、自分の不快感を笑い飛ばし、自分のおかしみを皆で分ける)

◎ 慈愛の応酬: 「善でもって毒を制す」「慈愛は慈愛を呼ぶ」

◎ 矯正の慈愛: 社会的に不適切な行為に対しては、自らが慈愛の行為を示しつづけ、矯正させる。

(← 相手には分別があるはずだから、自ら気がつくはずだ)

◎ 予防的慈愛: 相手の敵意や悪意を未然に防止するために、自ら笑い、慈愛の行為を打ち出す。

※ 予防的殺人 = 攻撃を受けることへの恐怖から殺人を試みる (過去にはかなり一般的な殺人の動機らしい)

◎ 最大の社会的制裁 = 念の入ったシカト (引き下がり) = 関係の断ち切り (*I am sorry = ahivarit*: 私を避けなさい)

まったく挨拶されず、沈黙をもって迎えられ、自分の提案や依頼には丁寧に応えられるが、周囲から何かを提案されたり依頼されたりすることがなくなる。要するに、相手が能動的に働きかけることがなくなる。

◎ 慈愛が過ぎると相手の自律性への侵害 (侮蔑) となる (慈愛を無制限に注げる対象 = 分別のない子供だけ)

(C) 理想的なパーソナリティ = *Stand Alone Complex* を地でゆく人

自らの意志のみで行動する自律した個人として (*Stand Alone* = スタンド・プレー ↔ 社会的に規定された個人 = チーム・プレー)、集団に繋がりがつづけること (*Complex* = チーム・ワーク)。

◎ 「自律の見栄と面子」 (*ihuma-*) と 「孤独への恐怖」 (*naglik-*) のジレンマ

→ <自律の暴走> と <愛情の暴走> を相互に牽制し合う

◎ 「自律の見栄と面子」 (*ihuma-*) と 「孤独への恐怖」 (*naglik-*) のバランスの実現

→ 「四六時中密集しているのに心地よい」というアメニティの感覚

(プライバシーが守られているのに、温かい保護の中で集団全体への一体感を感じる)

「実のところ、カルマック (秋の一時住居) で暮らすことになるのかどうか、私には分からなかった。そうしたいのかどうかさえ、分からなかった。一月前の夕方、一杯のお茶をすすめながら、イヌツティアックが私を娘として迎えたとき、暖かく守られていると感じながらも、今や、イヌツティアックの住まいに移ることになるのも間近だという恐怖が私の中でふくれあがるのを感じた。終日二十四時間、他の人々と一緒にいることに耐えられるだろうか。この一ヶ月の間、私の個人テントが避難所になっていて、毎晩、キャンプの他の人々が寝静まると、そこに引きこもって、パノック (無発酵揚げパン) やビーナッツ・バター、煮た米、凍ったナツメヤシ、ヘンリー・ジェームズで荒廃した心を慰めた

のだった。そうして生き返るための気ままな時間、それを失うことを恐れていた。11月にイグルーを建てるまで、どうかイヌッティアックと一緒に住むよう誘わないように私は折っていた。(中略：この間、ブリッグスの独立テント設営の空しい努力とイヌイトたちの静かなシカト、結局、ブリッグスが折れる)

二週の間、アムヤトでの冬のキャンプに移動するために畳まれるまで、テントは空っぽで使われないまま、そこに立っていた。この二週間、私は隠れ家の必要を感じることはなかった。イヌッティアックの住まいの温かい保護の恩恵に浴していたのだ。私に必要な孤独は、イヌッティアックと一緒に魚獲りに出かける朝の川で、あるいは、驚いたことに、午後のカルマックの中でさえ、手に入れることができた。午後のカルマックは訪問客でいっぱいだったが、理解できない静かな会話の流れに慰められつつ周りから遮断されて、自分の中に引きこもることができた。私のテントの愚行に触れる者は誰もいなかった。テントを畳むのを手伝ってくれるときですら。

多くの点で、イヌッティアックの住まいでの生活は、独りだけのテントでの生活よりもずっと安逸なものだった。一つには、もう客のもてなしをしなくてすむようになったということだ。私のために確保された片隅に静かに座り、イヌッティアックとアツラックが訪問客をもてなすにまかせることができるということで、孤立することへの不安なしにプライバシーを得ることができた。そしてまた、イヌッティアックとアツラックは、私が歓迎されていると感じられるように最善を尽くしてくれた。それは、何をすればよいのか教えたり、食べさせたり、大地と気候に無知な私を危険から守ったりすることだけでなく、それ以上のことを親として私のためにしてくれることに感じられた。また、私に心地よいように、その住まいでの生活を調整してくれる思いやりも感じた。そうしたければ、いつタイプを打つても、夜いつもより遅くまでランプを点けていても、「時々」だったら皆に分けずに白人の食べ物を食べてもよいと、当初から請け負ってくれた。「お前は白人なのだから。」しかも、私が別のカルマックを訪問して夜を過ごすときには寂しいとさえ言うてくれた。何よりもこのことばが一番心に暖かくしみた。」(Briggs 1970: 237-241)

(3) 幼児の教育：*qaujivallianiaqtuq* (覚醒) という発想

＝◎幼児の分別は覚醒するのであって、しつけるのでも、教え込むのでもない。

←通常、幼児には二世代上の親族の名前＝魂＝関係を継承しており、すでにその名前＝魂＝関係はすでに幼児に宿っているが、覚醒していない

覚醒のはじまり：周囲の人々を見分け、周囲の会話を理解したり覚えていたりするようになる

→自意識の誕生：世帯仕事を進んで手伝い、技能を習得し、古老の指図に従い、何よりも感情を抑制しはじめるようになる

◎基本は自分で悟らせる：言葉による教え、真似るべき手本の提示、謎かけ、からかい

◎決して叱らない (叱れない)、強制しない (強制できない)

2-4 イヌイトの選択＝相互行為の制御の方法Ⅱ：戦術 (相互行為の不確定性を受け入れて利用する)

(1) 戦略 (「自分の期待＝他者の行為」となるように不確定性を排除) はありえない

←◎自己と他者の自律性の尊重 (基本的に個人は何をするのも自由)

(相手は何をするか分からない、相手が勝手なことをしても *ajumatman*、相手を詮索するのは失礼、個々人の行為はあくまで自分の自発的な意志によるものなので、相手に何かを強制することなどできない)

(2) 予防的に、ともかく徹底して適切な行為 (分別と慈愛ある行為) を打ち出しつづけ、相手から嫌われて関係を切られないようにする。

←イヌイトにとっての定常状態＝人間は慈しみ愛されるべき存在なので基本的に繋がっている

(生きていること=魂があること=誰かとの関係にあること)

イヌイトにとっての異常事態=関係が切れること

- (3) 相手の不適切な行為(分別と慈愛なき行為)をしてきたら、相手が適切な行為(分別と慈愛ある行為)で応えるようになるまで、「からかい」と笑いのカウンター・アタックで応える。
(→おとなしく、どこか怯えたようなイヌイトの青年、からかいへの恐怖?)
- (4) 相手が適切な行為(分別と慈愛ある行為)で応えるようになるまで、自分が適切な行為(分別と慈愛ある行為)をひたすら打ち出し続ける。
→「分別」がある者ならば、気付くだろう。
→駄目ならば、引き下がってシカトする。それでも、頼まれれば慈愛ある行為を贈る。
しかし、こちらからアクションを起こすことはない。つまり、自分の側で関係の回路を絶つ。

3 社交としての生業：

生態的な関係と社会関係を循環的に生成するオートポイエーシス・システム

出発点：野生生物と人間の互酬的關係というイヌイトの説明をどう理解するか。真に受け取ってみよう。つまり、擬人化による比喩でもなく、実際に起きていることをそのまま語っていると考えてみよう。(→資源人類論文)

(アザラシは人間に自身が身に纏っている肉や毛皮を提供してその社会の再生産を助ける一方で、人間はそのアザラシに対して様々なタブーを守りつつ深い敬意を払い、客人として適切にもてなすことによって、アザラシの魂 (*tagniq*) がその身体から離脱して新たな身体を得ることを手助けし、その社会の再生産を助ける。)

3-1 イヌイトの出発点：孤独(関係が切れること)への恐怖

(1) 定常状態としての「関係があること」

◎社会関係の出発点=じゃぶじゃぶと注がれる愛情に溺れる幼年時代

◎野生動物との関係が断ち切れること=飢餓と死滅

(2) 魂 (*tagniq*) = 関係 (→身体資源論文)

※隔世代で受け継がれる名前の魂=社会関係の継承(自分の子供を「父ちゃん」と呼ぶ)

(3) 相互行為(贈与の応酬)を起動するエンジン

=行為者(贈与者)の側の孤独への恐怖

≠行為の受け手(被贈与者)の側の負い目

→負い目は外へ放り投げる(自分で負い目を負わない)

◎何かを頼んだり、物をねだったりするとき、自分のためではなく、困っている別の人のためにと理由付けする。

◎依頼を断るとき、あなたよりもっと大変な人がいるからと言う。

あるいは、負い目を抹消する(彼は私を助けたかったのだから助けた)

→相互行為の当事者たちは、相互に相手から関係を断ち切られることへの恐怖のために、自主的に適切な行為(分別と慈愛ある行為)の応酬を予防的に続けることになる。

3-2 生業の理念型：生態的な関係と社会関係を循環的に生成するオートポイエーシス・システム

(実際はもっと複雑で、ちゃんと考えないとまずい)

(1) すべての始発点としての動物の魂 (人間との関係 = 「食べられるもの / 食べるもの」関係)

(2) 動物の魂 (人間との関係) 維持のための人間の側の予防的な行為 (分別と慈愛ある行為)

= 動物への悪意がなく、敬意を払った適切な狩猟の努力 (←人間にとってこの関係が切れたら大変)

このとき、もちろん重要なのは狩猟の技術 (→身体資源論文)

= 自律しているために勝手なことをする動物を適切なカウンター・アタックの連打で「ハンター / 獲物」関係になるようにする (打つ手を究める)。

(3) 動物の魂 (人間との関係) 維持のための動物側の予防的な行為 (分別と慈愛ある行為)

= 動物による肉の贈与 (←動物も関係が断ち切れて孤独になることが恐ろしい)

(このとき、動物が自主的に贈与したくてしたのだから、ハンターに負い目は生じない)

(4) 贈与された肉のシェアリングと共食

= ◎動物と人間の「食べられるもの / 食べるもの」関係の成就 (=動物の魂の再生)

◎人間同士の社会関係の成立 (*ilammarrit* の成立)

シェアリングと共食 = 人間関係維持のための予防的な行為 (分別と慈愛ある行為) を打ち出す絶好の機会。共に食べ、語り合い、笑い合い、助け合う。

→情報の共有がおきる (→カウンター・アタック (打つ手) が豊かになる)。

(5) 次の狩猟へ

「野生生物と互酬的關係を築くためには野生生物を資源化しなければならず、野生生物を資源化するための手段は自らの打つ手だけなのだから、その資源化のためには資源利用者の立場にある自分たちの間で過去に打たれてきた手を共有することによって、自らが打つ手を豊かにしなければならない。野生生物との互酬的關係があるから生業活動が可能になるわけでも、社会関係の規範があるから資源と経験を共有するわけでもない。社会関係は資源化の技術を、資源化の技術は野生生物との関係を、野生生物との関係は社会関係を生み出すのであり、この循環が生業そのものなのである。イヌイトにとって生業とは、資源化の努力によって野生生物との生態的關係の秩序と自分たちの間の社会關係の秩序を絶え間なく循環的に生成し、彼らが「大地」と呼ぶ生活世界を紡ぎあげてゆく実践なのである。」(身体資源論文)

3-3 社交としての生業

(1) イヌイトの言う通り、動物との生態的な関係と人間同士の社会関係は平行である。
= 分別と慈愛の原理で両者を一貫して説明できる。

(2) 動物との生態的な関係も人間同士の社会関係も、字義通りの意味で社交である。

= カウンター・アタックの連打 (打つ手を究めること) で一定の関係に入って維持。

(3) 社交の循環的な連鎖である生業によってのみ世界全体 (*nuna*) の秩序が生成し集団が生

成する。

＝生業の社交連鎖が途切れると世界の秩序が崩れる。だからやめられない。

3-4 シェアリングと共食についての覚え書き

(1) 予防的に動物から贈与される肉の所有者は誰か？→「所有」の問題へ

私には、動物を獲ったハンターであるとは思えない。通常、ハンターはその場で他のハンターと一次分配し、その後、自分の *ilammariit* にもちかえる。通常、自分の父親の世帯にしかない冷凍庫に保管して、その父親の世帯に *ilammariit* 全員が集まって共食する。私の目には、ハンターは単にデリバリーしているようにしか見えない。人間の間では誰も所有者でないのかもしれない。

(2) 贈与しているのは動物だけではないか？

◎人間の間では、共食を基本的にシェアしているだけにしか見えない。

←所有物をあげるというより、誰の者でもない（強いて言えば動物の）肉を割って持ち去る（シェア）、あるいは肉を囲んで食べる（共食）というように見える。

※レストランで「一皿をシェアする」という時、割り勘が普通。つまり一皿は二人のもの。

※共食によってできる *ilagiit* の意味は「部分の集合」だが、これは「肉の部分の集合」ではないのか？

→ *niqaiturvigiiit*（交換パートナー間での分配）、*pajuktuq*（自主的に他のテントや住居に配る分配）、*minnak*（訪問者に肉を与える）、*akpaaqtaujuuk*（特定の人を招待する分配）、*ningiq*（ハンターによる肉の分配）などのさまざまな種類の分配をどう整理するか？ これらを共食とシェアの派生型として整理できないか？

◎「動物／人間」＝「食べられる者／食べる者」「贈与するもの／共食してシェアする者」と考えられないか？

肉の自家消費の禁止＋孤独への恐怖＝動物の自主的な贈与→種の違いを生み出す

肉の共食とシェア＝一つの塊を分けること

共食とシェア（分けよ）の命令＝全体を所有することの禁止

→分ける相手がいないと困る＝孤独が問題になる

(3) イヌイトの社交の原則は贈与と負い目ではなく、「関係を切られて孤立することへの恐怖」ではないのか？ 贈与されてもイヌイトは何の負い目も感じなくてすむのではないのか？

4 終わりに：アフォーダンスをアメニティに変換するオートポイエーシス・システム

4-1 アフォーダンスは集団生成の必要条件だが、それだけでは不十分

集団を生成する生業が循環するために必須なこと

＝◎一度実現させたアフォーダンスの活用に必要な自他の関係を安定的に反復させる。

(知覚心理学の場合、身体の仕組みの進化が問題になる)

る)

◎安定的に反復されるべきアフォーダンスの関係を特定しなければならない。

(環境はただ許容（アフォード）するにすぎない)

(知覚心理学の場合、適応で説明される)

4-2 心地よい住まえるアメニティな世界：社交の循環的連鎖としての生業が生成する世界

(1) 親密な生態環境 (→以下の引用)

(2) 「四六時中密集しているのに心地よい」というアメニティの感覚 (→p.7の引用)

(プライバシーが守られているのに、温かい保護の中で集団全体への一体感を感じる)

(3) 「冷たい」空間を「暖かい」場所に編成するプロセスとしての生業

このプロセスにおいては、「心地よさ」が重要な軸になるのではないかと

(4) 相互行為の種類？：「嫌われたくない人々」が望む世界だけがアメニティな世界なのか？

→贈与と負い目が生み出す世界＝権威を競う世界？

(北西海岸インディアンが私の性に合わ

ない理由？)

「何年にもわたって川を上り下りし、宿営地から宿営地へ、漁場から漁場へと渡り歩くなかで、私には無限に広がるように見え、はじめは空虚に思われた大地には、よく見慣れた顔がそうであるように、そこに住まう者たちにとっては、さまざまな連想が刻み込まれてきたのだ。こうした親密さ、そしてもちろん、わくわくするような変化、これらを見てとることにも、ウテックヒュクハリングミウトの生き方の喜びがある。」(Briggs 1970: 34)

「大地は冷たく、広大である。それは荒野だ。容赦がない。無慈悲でさえある。しかし、大地は憩いの場でもある。生命を育み、息づいている。血を流すことすらある。それは我々の母なる大地の一部である。それは美しい。それは私たちの文化を育む。私たちはその一部であり、それは私たちの一部である。我々是一つなのだ。」[イヌイトの先住民運動のリーダーであり、「ヌナヴトの父」と呼ばれるジョン・アマゴアリックの言葉 (Amagoalik 2001: 9)]

「『大地とともにあって幸せなのか』と白人から尋ねられたら、私は『大地とともにあってとても幸せだ』と告げるだろう。そこには動物がいて、何マイルにもわたってよく見渡せる。一見すると不毛に見えるが、そこを旅すれば動物を見ることができる。生きている動物を見ることはイヌイトにとって何よりもよろこばしい。」[イグルーリクのハンターであるルイ・アリナルクの言葉 (Brody 1976: 195)]

2. 「霊長類学における非構造と構造」

足立薫 (立命館大学 (非))

日本霊長類学のパイオニアの一人である伊谷純一郎は、霊長類社会の進化理論を構想する際に、社会構造の類型化という手法をとった。1970 から 80 年代の彼の著作には、「構造」に着目した理論の展開が多く見られる。それに対して、伊谷は 90 年代以降、「構造」と対をなす、「非構造」についての考察を行うようになる。「非構造」の位置づけは、人類進化の過程における、社会あるいは「集団」の形成に、重要な意味を持つ可能性が指摘されている。

伊谷純一郎による社会構造の進化論は、BSU (basic social unit) を基礎としている。BSU は集団の構成 (オトナオス、オトナメスの比) と移籍のパターンで構成されている。「霊長目全体の社会構造を俯瞰し、その全体の把握を試みるために」伊谷が提出するのは、6つの構造類型とその進化のプロセスである。

それに対して、90 年代以降に言及の増える「非構造」では、たとえばニホンザルの「孤猿」が取り上げられる。ニホンザルはオスがある年齢に達すると、生まれた群れをはなれてハナレザ

ル＝群れ外のソリタリーオスとなる。このソリタリーのオスは、移籍の途上で集団に属さずに行動する。これを「孤猿」と呼んで、ニホンザルの生活の構造的側面である群れ＝集団生活と対比させている。

伊谷の取り上げる「非構造」は単独者とは限らない。鳥類に見られる非常に個体数の多い大集団、あるいは、異種の混交した大集団が「非構造」とされる。中でも混群は、霊長類や鳥類でひろく見られる。鳥類では非繁殖期のみ混群が形成されるのに対して、霊長類では一年中、定常的に混群を形成する例が知られている。

伊谷は構造と非構造は、生物の生活の異なる側面を表しており、「それぞれの種社会がもつ固有の構造の彼方に、非構造の世界があり、そこには構造のなかにだけいたのでは見いだすことのできない異次元の、おそらく自由や楽しみと言ってよい世界があるにちがいない」ことを指摘している。そして、この構造の属性を放棄した非構造の中にこそ、社会の変革や進化をもたらす源泉があると予測している。「構造」が適応論的な、通常の生物学で描き出せる世界であるとすれば、「非構造」は損と得、勝つと負けるだけでは割り切れない世界である。孤猿は繁殖成功度の視点からは測ることができず、混群は最適採食戦略や捕食者回避の利得に換算することができない側面を持つ。

今西錦司が提出した「種社会」の概念は、生活形を同じにする個体からなる社会であり、同種の個体がすべて入る。個体が集団的な生活をしているか、単独的な生活をしているかはどちらでもよい。生活形とは、単に形だけをあらわすのではなく、生活の場＝環境と強く結びついた概念であり、生活の場と生活する主体とが結びついたものである。今西の言う生活の場とは、空間的な場所というだけでなく、生き物が生きていく現象を支える様々な環境の要素が含まれる。生きているという現象そのものの中に、主体と環境を不可分のものとして捉えたのが、生活形という概念なのである。

「種社会は構造と非構造をあわせもつ」という伊谷の図式化は、今西の「種社会」の定義と併せて考えれば、普遍的に動物全体にとって重要となる。言語、知能、文化といった要素の有無に関係なく、社会的なるものが生物の生活において本質的な意味をもつ。従来、人類進化を生物学や自然人類学の視点で考察するとき、「構造」のみが対象となり「非構造」の側面はほとんど無視されてきた。「非構造」の論理の中から、新たな生物学による集団現象の進化的理解を目指すことが今後の課題となるだろう。

